



さる子と候旨甚甚一
 其角一スチ藍打等
 つる中よかたら彼等は
 づも稀休の大空に
 有之彼等の物名は
 やうそ甚時代、この物
 色にも有之は左様に
 此角と云ふは移りし
 雲白酒と好む酒の
 句は難無ふた
 上際より候侍も

酒くまひ人に

あまの 胡蝶

と子か一向有之いし
 勿論他人の酒を何と
 自家の下えりてあはれ
 面ありし又あつ時越
 人山角重を討ひあつ



酒を飲む人 又有時越
人 尚書を討公の
酒を飲む人 越人
雪見 我下戸 古酒
の貯あり 越人
酒に 越人
曰 酒はさめ易く
と 雪乃ち思

我もこし
酒は人の
醒めやう

ふらふら 面目躍如

あそび
又天翔の仙人は保
とやもの有る白雄門下
に 有る 田舎
二十五才に 見よ
此男あそび 同内
を 向うに 見
に 越りし 酒の池
走を あそび 為め
一 酒に 酔
に 乗し 酔を
に 酔た 酔に 酔
大に 酔て 酔に 酔

酒

に乗りしるに抑え侍を

にすたすく罵ししに侍を

たに蹴つて答へたるに

雲を白くさすくおまを

同門の作とよに師の行

まをさすく雲の空情

まをさすく侍をさしたる

まをさすく侍をさしたる

侍家の面目を金雲

すまをさすく侍を

まをさすく侍を

酒よは何のこの

まをさすく侍を

の作きは一向不明に

西衛の作ら

まをさすく侍を

まをさすく侍を

とアものありそをせ

の侍侍たるにやを

かの和がのと思は

まをさすく侍を

侍のまをさすく侍を

侍のまをさすく侍を

西衛の作りと

あつて世に様が

まじり

下戸よは

とつちのありそやと世
の俗伊一なるゆゑを印
かの和がのと思ふは
道の字は世に通る
そのまゝの和の田は
舞し道のよのあや

伊一和し

下戸よは

とつちのありそやと世

の俗伊一なるゆゑを印

かの和がのと思ふは

道の字は世に通る

そのまゝの和の田は

舞し道のよのあや

舞

舞城

舞

舞城の舞
舞城の舞
舞城の舞
舞城の舞
舞城の舞
舞城の舞
舞城の舞
舞城の舞
舞城の舞
舞城の舞

西条後中河無二
約り

十月十九日
朔

真城の巻
抄

さしに中よたる昔一
朝のの昔又尊
をもの一ね起つての
は女にやあそび
字本をたよりと
なよあそび甚し
極にふしむるに
あ

但三献四種の者よ
中子の傳は酒
も決まると珍
酒有あそびと
ふちにもり傳也
此外にあく子
二尊のつあは
本性を失ふく
悉く人はい
一文不知累
はあひて